

会計教育において入門科目が学生に与える影響
— 学生向けアンケート調査に基づく実証分析 —

石田 裕明*

The Impact of Introductory Courses on Students
in Accounting Education
— An Empirical Analysis Based on a Student Questionnaire Survey —

ISHIDA Hiroaki

要約

本稿では、高松大学経営学部における簿記系の科目から会計学系の科目への必修科目の変更について、その影響を明らかにするとともに、初めに簿記を学んだ学生と、初めに会計学を学んだ学生に何らかの異なる特徴がみられるのかについて、自由記述を中心としたアンケート調査に基づいた分析を行っている。

アンケート調査に基づいた分析の結果、大学入学前の学生が持つ会計学と簿記に対するイメージは計算が難しいなどで共通している一方、簿記系の科目を初めに履修した学生は、問題を解くことができると面白いといったポジティブなイメージと、計算や用語が難しいというネガティブなイメージが混在した複雑なものに変化していることが明らかとなった。他方、会計学系の科目を初めに履修した学生は、大学入学前のネガティブなイメージが解消され、財務諸表を見て企業を知ることが面白い、利益を得る方法を考える、実社会で役に立つなどポジティブなイメージに変化していることが明らかとなった。

キーワード：会計教育、簿記教育

Abstract

This paper clarifies the impact of changing required courses from bookkeeping-related subjects to accounting-related subjects within the Faculty of Business Administration at Takamatsu University. It also analyzes, based on a questionnaire survey centred on open-ended responses, whether any distinct characteristics emerge between students who first studied bookkeeping and those who first studied

受理年月日 2025 年 9 月 5 日 * 高松大学経営学部講師

accounting.

Analysis based on the questionnaire survey revealed that while pre-university students shared common perceptions of accounting and bookkeeping, such as finding calculations difficult, students who took bookkeeping courses first developed more complex perceptions. These perceptions blended positive aspects, like finding it interesting once they could solve problems, with negative aspects, such as finding calculations and terminology difficult. On the other hand, students who first took accounting-related courses saw their pre-university negative perceptions dissipate. Their perceptions shifted to positive ones, such as finding it interesting to understand companies by looking at financial statements, thinking about ways to generate profits, and perceiving the subject as useful in the real world.

Keywords : accounting education, bookkeeping education

1. はじめに

1. 1 「会計離れ」について

2010年代半ばに会計学を専攻する学生の減少などの「会計離れ」が生じており、日商簿記検定などの資格試験の受験者数について減少の傾向にあることが指摘された¹。このような「会計離れ」が生じた要因の一つに、人工知能などの情報技術の進展によって会計業務が代替されるといった情報が広がったことが挙げられている²。

近年では、上記の情報は誤解であり、人工知能が会計業務の生産性を高め、会計に関連する職業人は、現場や経営者との対話が重要になるという認識が広がりつつある³。また、日商簿記検定などの資格試験の受験者数が回復の傾向にある⁴ことから、2010年代半ばにみられた「会計離れ」は、量的な視点からは改善されつつあるといえよう。しかし、会計学や簿記を好きになる学生が増加しているのかという質的な視点については明らかにされておらず、課題として残されている。

1. 2 「高松大学経営学部会計コース」の現状

令和7年度現在において高松大学経営学部では、1年次生から2年次生への進級時に4つのコース（企業経営コース、経営情報コース、会計コース、スポーツ経営コース）から学生が希望するコースを選択する制度となっている。

¹ 日本公認会計士協会・会計大学院協会（2015），pp. 87-92。

² 会計・税務人財養成推進協議会「会計・税務人財養成が急務となる現状」（<http://www.zb.em-net.ne.jp/~kawano/ATHRG/Status.html>）、2025年8月30日訪問。

³ 兵庫県立大学通信「会計専門職大学院における教育」（<https://u-hyogo-webmag.com/archives/article/20230405radikan>）、2025年8月30日訪問。

⁴ 日本商工会議所「簿記 受験者データ」（<https://www.kentei.ne.jp/bookkeeping/candidate-data>）、2025年8月30日訪問。

令和5年度のコース選択では、1年次生の3分の1程度が会計コースを希望しており、令和6年度のコース選択においては、1年次生の半数以上が会計コースを希望しているという状況であった。令和5年度と令和6年度における会計コース希望者数の変化の要因の一つとして、会計コースにおけるカリキュラム変更が挙げられる。具体には、図1に示すように必修科目であった「簿記演習Ⅰ」を選択科目に変更し、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として新設している。

このカリキュラム変更の意図は、高松大学経営学部として会計リテラシー⁵の養成に重点を置くというものである。これは、高松大学経営学部内の議論において、戦略的に会計情報を活用する力は、会計コースに限らず、他の3つのコースの学生においても重要だが、それが十分には高まっていないという指摘があったことが経緯となっている。

また、日商簿記検定の取得が学生の学習意欲を高めるモチベーションとなっている一方で、必修科目によって一様に提供する教育では、簿記に対する学生の多様な学習ニーズに十分に答えられていないことが現場の肌感覚として共有されていた。

上述の背景をふまえ、高松大学経営学部の会計コースでは、全コースの学生が会計リテラシーを身に付けることを目的に「会計学入門Ⅰ」を必修科目として新設し、学生の多様な学習ニーズに柔軟に対応するために「簿記演習Ⅰ」を必修科目から選択科目にカリキュラムの変更を行った。



図1. 高松大学経営学部の会計コースにおけるカリキュラム変更

注. 筆者作成

なお、「簿記演習Ⅰ」と「会計学入門Ⅰ」の教育内容の違いは、以下のとおりである。

一般的に「会計 (accounting) は、ある特定の経済主体の経済活動を、貨幣額などを用いて計数的に測定し、その結果を報告書にまとめて利害関係者に伝達するためのシステムである⁶」と説明される。「簿記演習Ⅰ」は報告書である貸借対照表および損益計算書を作

⁵ 会計リテラシーについては、日本公認会計士協会 (2020) を参照されたい。

⁶ 桜井 (2025), p. 1。

成するために必須となる複式簿記の技術を修得することを目的とした科目であり、「会計学入門Ⅰ」は作成された貸借対照表および損益計算書を読み解く力を修得することを目的とした科目となっている。

そのため、「簿記演習Ⅰ」は会計における測定の面を重視した教育内容⁷であり、「会計学入門Ⅰ」は会計における伝達の面を重視した教育内容⁸であるという違いがある。

1. 3 本稿の課題

令和6年度のコース選択時においては、高松大学経営学部会計コースは、1年次生の半数以上が希望するコースとなっているが、カリキュラム変更が意図していた当初の目的である会計リテラシーの養成が達成されているのかについては不明である。また、会計コースを希望する学生数が増えているものの、学生が会計学や簿記を好きになっていることで希望者数が増えているのかという質的な観点は明らかにされていない。

なお、簿記系の科目から会計学系の科目への必修科目の変更について、その影響を明らかにした研究は、筆者の知る限りではこれまで行われていない。また、初めに簿記を教えるべきであるのか、会計学を教えるべきであるのかについては議論があるが⁹、これを実証的に検討した研究は、筆者の知る限りではこれまで行われていない。

これらの理由として、カリキュラム変更の影響を分析するための量的データ、質的データの収集が困難であることが挙げられる。

そこで、上記の課題を明らかにするために、本研究ではカリキュラム変更前に「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生と、カリキュラム変更後に「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生に対して、自由記述を中心としたアンケート調査を実施した。

本稿は、簿記系の科目から会計学系の科目への必修科目の変更について、その影響を明らかにするとともに、初めに簿記を学んだ学生と、初めに会計学を学んだ学生に何らかの異なる特徴がみられるのかについて、量的データ、質的データに基づいて明らかにすることを目的とする。

2. 学生に対するアンケート調査

2. 1 アンケート調査の実施方法

カリキュラム変更前に「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生に対しては、筆者が担当している財務会計論（2年次・後期）の第15回目の講義終了後にアンケート調査を行った。カリキュラム変更後に「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生に対して

⁷ 簿記演習Ⅰのシラバス（令和5年度）については、(<https://www.takamatsu-u.ac.jp/wp-content/uploads/2023/04/manage.pdf#page=118>)を参照されたい。

⁸ 会計学入門Ⅰのシラバス（令和6年度）については、(<https://www.takamatsu-u.ac.jp/wp-content/uploads/2024/03/manage.pdf#page=298>)を参照されたい。

⁹ 松本（2007），pp. 84-85。

なお、学生に対しては、アンケートへの回答内容を筆者が行う研究に使用し、研究結果を論文として公表することを説明したうえで、同意を確認している。また、学生の本音を引き出すために、図2に示すようなアンケート用紙に匿名で筆記してもらう形式で実施している。

注. 筆者作成

表 1 に実施したアンケート調査の内容を示している。

表 1. 実施したアンケート調査の内容

カリキュラム変更前に「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生に対する質問

質問 1-1	簿記演習Ⅰ、簿記演習Ⅱを履修することで、会計学や簿記に対する興味関心は高まりましたか？
選択肢	1とても高くなった、2高くなった、3変わらない、4低くなった、5とても低くなった
自由記述	該当する項目を選択した理由について自由記述で回答
質問 2-1	簿記演習Ⅰや簿記演習Ⅱの講義のように、教科書の解説後に問題集を使用した問題演習に取り組むことで、会計学や簿記に対する興味関心は高まりましたか？
選択肢	1とても高くなった、2高くなった、3変わらない、4低くなった、5とても低くなった
自由記述	該当する項目を選択した理由について自由記述で回答
質問 3-1	簿記演習Ⅰや簿記演習Ⅱの講義のように、教科書の解説後に問題集を使用した問題演習に取り組むことで、簿記に対する理解は深まりましたか？
選択肢	1とても深まった、2深まった、3変わらない、4深まらなかった、5全く深まらなかった
自由記述	該当する項目を選択した理由について自由記述で回答
質問 5	大学に入学する前の簿記に対するイメージを回答してください。
自由記述	上記の質問について自由記述で回答
質問 6	簿記演習Ⅰ、簿記演習Ⅱを履修した後の簿記に対するイメージを回答してください。
自由記述	上記の質問について自由記述で回答

カリキュラム変更後に「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生に対する質問

質問 1-2	会計学入門Ⅰ、会計学入門Ⅱを履修することで、会計学や簿記に対する興味関心は高まりましたか？
選択肢	1とても高くなった、2高くなった、3変わらない、4低くなった、5とても低くなった
自由記述	該当する項目を選択した理由について自由記述で回答
質問 2-2	会計学入門Ⅰ、会計学入門Ⅱの講義のように、実在する企業の財務諸表を参照したり、財務諸表を分析したりすることで、会計学や簿記に対する興味関心は高まりましたか？
選択肢	1とても高くなった、2高くなった、3変わらない、4低くなった、5とても低くなった
自由記述	該当する項目を選択した理由について自由記述で回答
質問 3-2	会計学入門Ⅰや会計学入門Ⅱの講義のように、実在する企業の財務諸表を参照したり、財務諸表を分析したりすることで、会計学に対する理解は深まりましたか？
選択肢	1とても深まった、2深まった、3変わらない、4深まらなかった、5全く深まらなかった
自由記述	該当する項目を選択した理由について自由記述で回答
質問 4	会計学入門Ⅰ、会計学入門Ⅱを履修することで、今後、簿記を学んでみたいというモチベーションは高まりましたか？
選択肢	1とても高くなった、2高くなった、3変わらない、4低くなった、5とても低くなった
自由記述	該当する項目を選択した理由について自由記述で回答
質問 7	大学に入学する前の会計学に対するイメージを回答してください。
自由記述	上記の質問について自由記述で回答
質問 8	会計学入門Ⅰ、会計学入門Ⅱを履修した後の会計学に対するイメージを回答してください。
自由記述	上記の質問について自由記述で回答

2. 2 アンケート調査の分析方法

本節では、実施したアンケート調査の分析方法を示す。

まず、質問 1-1、質問 2-1、質問 3-1、質問 1-2、質問 2-2、質問 3-2 の選択肢の回答結果を集計することで、カリキュラム変更前に「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生と、カリキュラム変更後に「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生で興味関心・理解について量的に異なる傾向がみられるのかについて検討を行う。

次に、質問 1-1、質問 2-1、質問 3-1、質問 1-2、質問 2-2、質問 3-2 の選択肢

の回答結果の理由が述べられている自由記述を KH Coder を用いて対応分析を行うことで、カリキュラム変更前に「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生と、カリキュラム変更後に「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生で興味関心・理解について質的に異なる傾向がみられるのかについて検討を行う。

そして、質問 5、質問 6 の自由記述を KH Coder を用いて共起ネットワークを作成することで、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生が持つ、入学前の簿記に対するイメージと「簿記演習Ⅰ」を履修した後の簿記に対するイメージを比較し、どのようにイメージが変化するのかについて検討を行う。

さらに、質問 7、質問 8 の自由記述を KH Coder を用いて共起ネットワークを作成することで、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生が持つ、入学前の会計学に対するイメージと「会計学入門Ⅰ」を履修した後の会計学に対するイメージを比較し、どのようにイメージが変化するのかについて検討を行う。

2. 3 アンケート調査の分析（興味関心・理解についての量的な傾向）

本節では、カリキュラム変更前に「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生と、カリキュラム変更後に「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生で興味関心・理解について量的に異なる傾向がみられるのかについて分析を行う。なお、本稿では「とても高まった（とても深まった）」および「高まった（深まった）」という回答をまとめて「興味関心が高まった（理解が深まった）」ものと定義している。

表 2 に示すように、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、約 68% の学生が会計学や簿記に対する興味関心が高まったという回答結果が得られた。表 3 に示すように、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、約 73% の学生が会計学や簿記に対する興味関心が高まったという回答結果が得られた。

よって、会計学や簿記に対する興味関心が高まる程度は、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生の方がわずかに高いことが分かる。

表 2（カリキュラム変更前の学生に対する質問）

質問 1-1：簿記演習Ⅰ、簿記演習Ⅱを履修することで、会計学や簿記に対する興味関心は高まりましたか？

選択肢	質問 1-1 に対する回答結果	
1 とても高くなった	16	17.78%
2 高くなった	46	51.11%
3 変わらない	26	28.89%
4 低くなった	0	0.00%
5 とても低くなった	2	2.22%

(n = 90)

表 3（カリキュラム変更後の学生に対する質問）

質問 1-2：会計学入門Ⅰ、会計学入門Ⅱを履修することで、会計学や簿記に対する興味関心は高まりましたか？

選択肢	質問 1-2 に対する回答結果	
1 とても高くなった	16	21.92%
2 高くなった	38	52.05%
3 変わらない	19	26.03%
4 低くなった	0	0.00%
5 とても低くなった	0	0.00%

(n = 73)

表 4 に示すように、教科書の解説後に問題集を使用した問題演習に取り組む学習によって、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、約 64% の学生が会計学や簿記に対する興味関心が高まったという回答結果が得られた。また、表 5 に示すように、上記の学習によって、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、約 71% の学生が簿記に対する理解が深まったという回答結果が得られた。

表 4（カリキュラム変更前の学生に対する質問）

質問 2-1：簿記演習Ⅰや簿記演習Ⅱの講義のように、教科書の解説後に問題集を使用した問題演習に取り組むことで、会計学や簿記に対する興味関心は高まりましたか？

選択肢	質問 2-1 に対する回答結果	
1 とても高くなった	15	16.67%
2 高くなった	43	47.78%
3 変わらない	27	30.00%
4 低くなった	3	3.33%
5 とても低くなった	2	2.22%

(n = 90)

表 5（カリキュラム変更前の学生に対する質問）

質問 3-1：簿記演習Ⅰや簿記演習Ⅱの講義のように、教科書の解説後に問題集を使用した問題演習に取り組むことで、簿記に対する理解は深まりましたか？

選択肢	質問 3-1 に対する回答結果	
1 とても深まった	14	15.56%
2 深まった	50	55.56%
3 変わらない	23	25.55%
4 深まらなかった	1	1.11%
5 全く深まらなかった	2	2.22%

(n = 90)

表 6 に示すように、実在する企業の財務諸表を参照したり、財務諸表を分析したりする学習によって、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、約 68% の学生が会計学や簿記に対する興味関心が高まったという回答結果が得られた。また、表 7 に示すように、上記の学習によって、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、約 75% の学生が会計学に対する理解が深まったという回答結果が得られた。なお、表 8 に示すように、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、約 75% の学生が簿記を学んでみたいというモチベーションが高まったという回答結果が得られた。

よって、会計学や簿記に対する興味関心が高まる程度は、「会計学入門Ⅰ」の学習内容の方がわずかに高く、学習内容への理解についてもわずかに深くなることが分かる。

しかし、簿記系の科目と会計学系の科目で興味関心や理解の程度に大きく異なる傾向は確認されないといえよう。そのため、簿記系の科目から会計学系の科目への必修科目の変更について、その影響を明らかにするために、回答結果の理由が述べられている質的データである自由記述を分析した。

表 6（カリキュラム変更後の学生に対する質問）

質問 2-2：会計学入門Ⅰ、会計学入門Ⅱの講義のように、実在する企業の財務諸表を参照したり、財務諸表を分析したりすることで、会計学や簿記に対する興味関心は高まりましたか？

選択肢	質問 2-2 に対する回答結果	
1 とても高くなった	11	15.07%
2 高くなった	39	53.42%
3 変わらない	22	30.14%
4 低くなった	1	1.37%
5 とても低くなった	0	0.00%

(n = 73)

表 7（カリキュラム変更後の学生に対する質問）

質問 3-2：会計学入門Ⅰや会計学入門Ⅱの講義のように、実在する企業の財務諸表を参照したり、財務諸表を分析したりすることで、会計学に対する理解は深まりましたか？

選択肢	質問 3-2 に対する回答結果	
1 とても深まった	13	17.81%
2 深まった	42	57.53%
3 変わらない	18	24.66%
4 深まらなかった	0	0.00%
5 全く深まらなかった	0	0.00%

(n = 73)

表 8（カリキュラム変更後の学生に対する質問）

質問 4：会計学入門Ⅰ、会計学入門Ⅱを履修することで、今後、簿記を学んでみたいというモチベーションは高まりましたか？

選択肢	質問 4 に対する回答結果	
1 とても高くなった	18	24.66%
2 高くなった	37	50.68%
3 変わらない	17	23.29%
4 低くなった	1	1.37%
5 とても低くなった	0	0.00%

(n = 73)

2. 4 アンケート調査の分析（興味関心・理解についての質的な傾向）

本節では、カリキュラム変更前に「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生と、カリキュラム変更後に「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生で興味関心・理解について質的に異なる傾向がみられるのかについて分析を行う。

分析を行うために、質問1-1、質問2-1、質問3-1、質問1-2、質問2-2、質問3-2の選択肢の回答結果の理由を記述したテキストに対し、KH Coderを用いた対応分析を実施した。分析に使用したKH Coderのバージョンは、3. Beta. 06aである。なお、「財務諸表」を強制抽出語として設定している。強制抽出した理由は、会計学や簿記において「財務諸表」は重要な語であるが、初期設定では適切な形で抽出が行われていなかったためである。

対応分析によって、各質問の選択肢の回答結果の理由に特徴的な語を捉えることができる¹⁰。例えば、図3であれば、質問1-1に「とても高くなった」と回答している理由に「検定」や「資格」という記述を特徴的に行っていることが読み取れる。

2. 4 1 興味関心・理解についての質的な傾向（カリキュラム変更前）

図3、図4、図5に示すように、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、会計学や簿記に対する興味関心が「とても高まった」、簿記への理解が「とても深まった」という学生は、問題を簡単に解くことができる、問題を解くことが面白い、検定や資格に興味があるといった記述を特徴的に行っていることが読み取れる。

さらに、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、会計学や簿記に対する興味関心が「高まった」、簿記への理解が「深まった」という学生は、問題を解くことができると面白い、反復練習をしているといった記述を特徴的に行っていることが読み取れる。

なお、それ以外の学生については、「難しい」という記述を特徴的に行っていることが読み取れる。

¹⁰ 樋口（2020），pp.174-175。

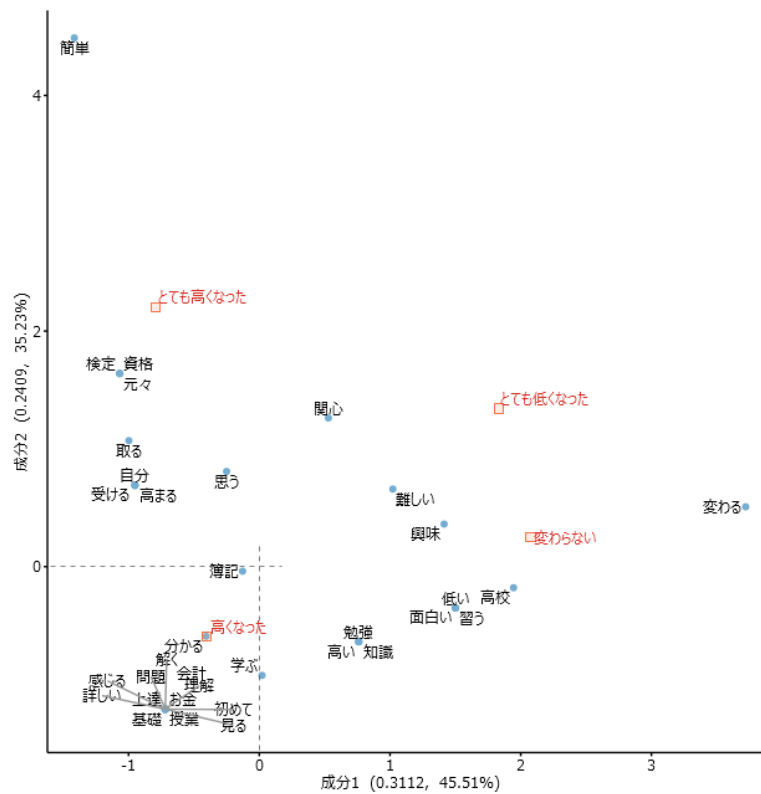


図 3. 質問 1-1 の対応分析（カリキュラム変更前の学生に対する質問）

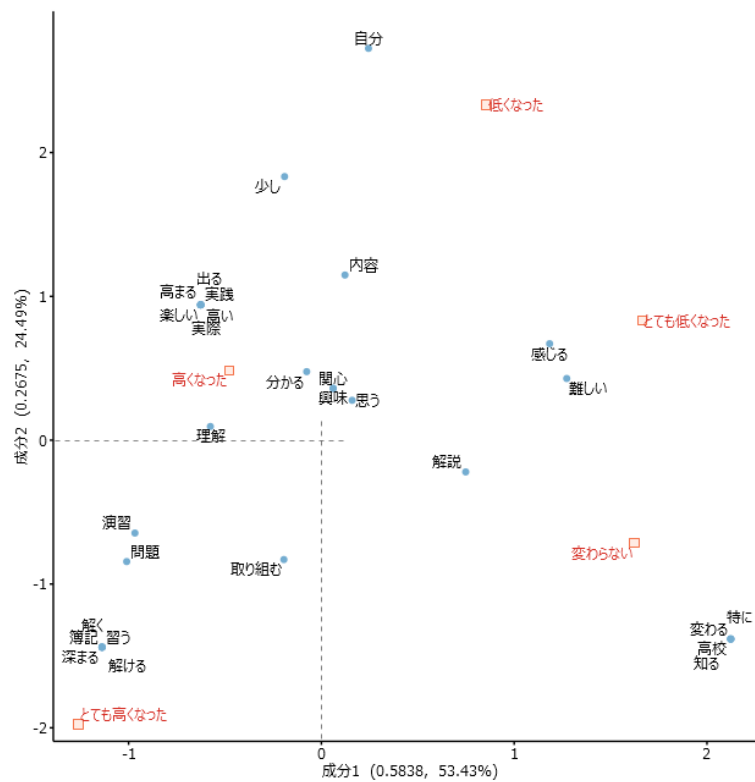
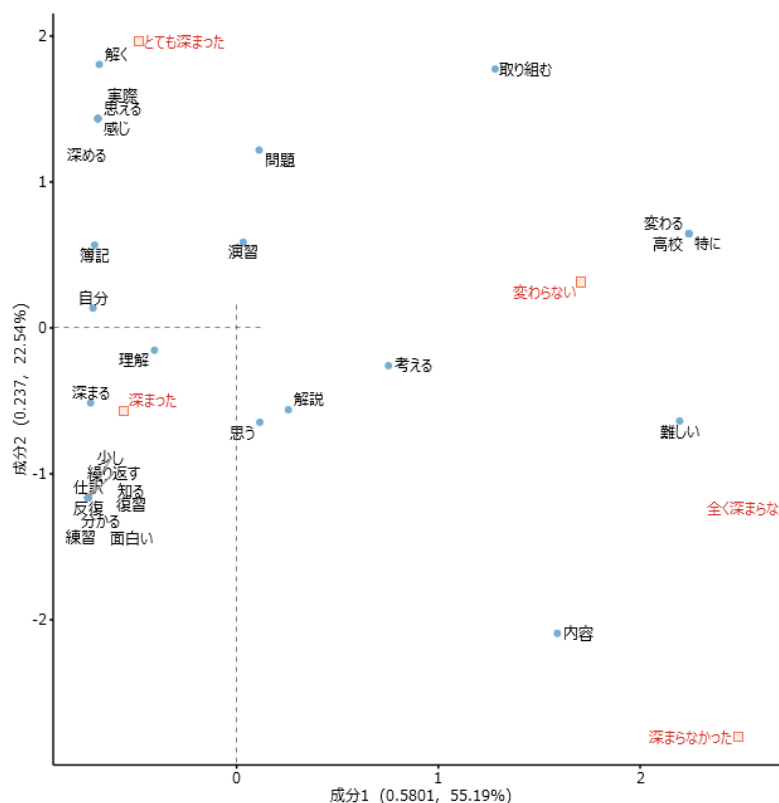


図 4. 質問 2-1 の対応分析（カリキュラム変更前の学生に対する質問）



2. 4 2 興味関心・理解についての質的な傾向（カリキュラム変更後）

図6、図7、図8に示すように、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、会計学や簿記に対する興味関心が「とても高まった」、会計学への理解が「とても深まった」という学生は、財務諸表を見たり、財務諸表を分析することが面白い、普段の生活の中で役に立つといった記述を特徴的に行っていることが読み取れる。

さらに、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生のうち、会計学や簿記に対する興味関心が「高まった」、会計学への理解が「深まった」という学生は、財務諸表を見るのが少し面白い、財務諸表の分析を少しできる、知っている企業で自分の生活と関連付けることができるといった記述を特徴的に行っていることが読み取れる。

なお、それ以外の学生については、「難しい」という記述を特徴的に行っていることが読み取れる。

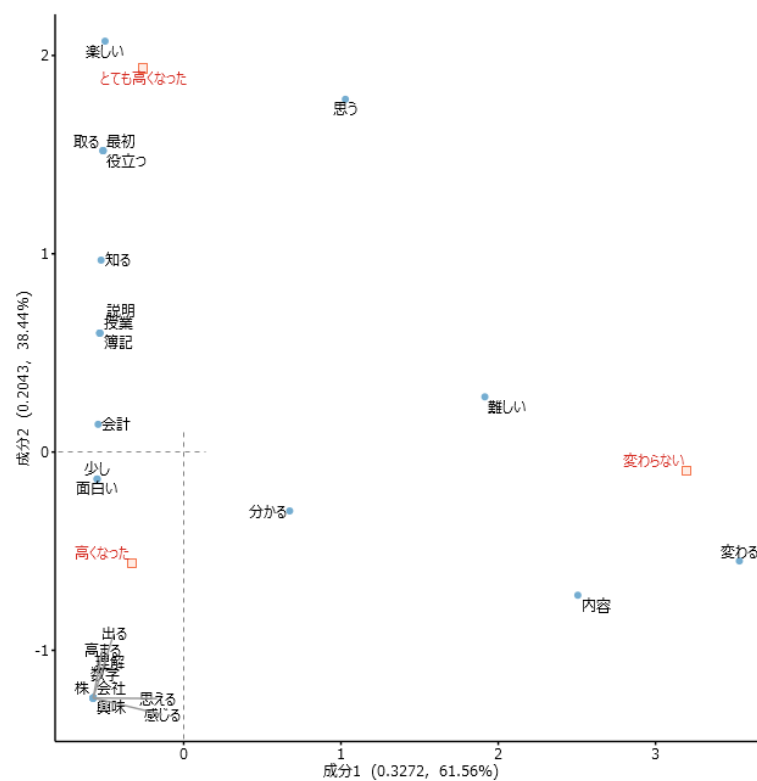


図 6. 質問 1-2 の対応分析（カリキュラム変更後の学生に対する質問）

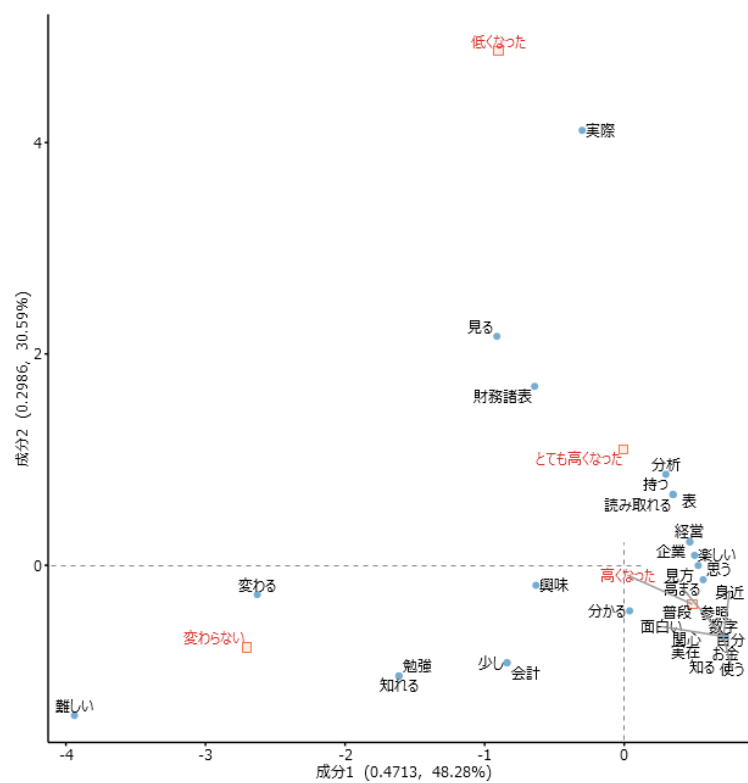


図 7. 質問 2-2 の対応分析（カリキュラム変更後の学生に対する質問）

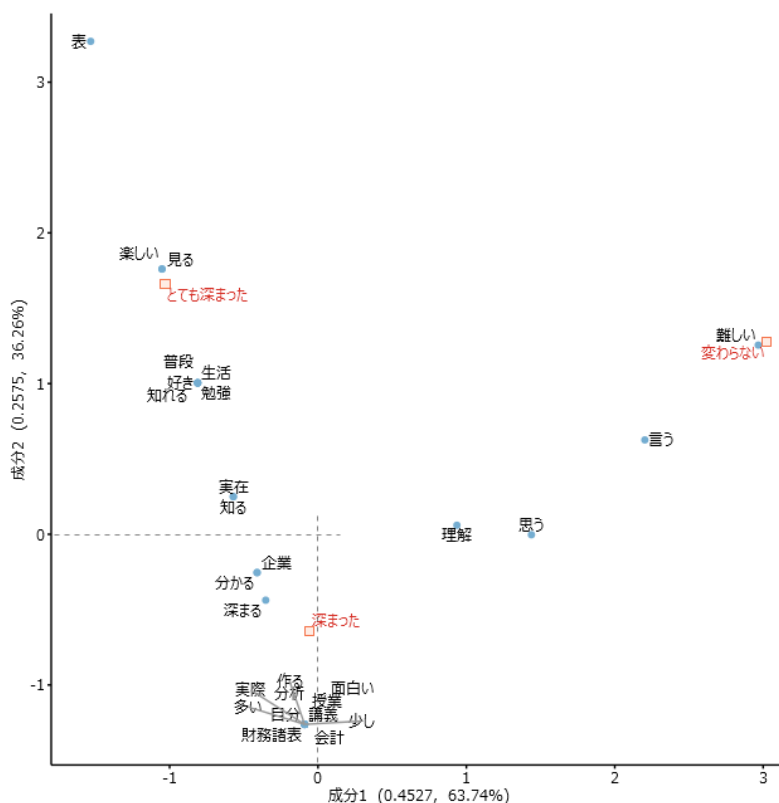


図8. 質問3-2の対応分析（カリキュラム変更後の学生に対する質問）

2. 5 小括

ここまで検討してきたように、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生と、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生では、興味関心や理解について量的には異なる傾向がみられなかった。

他方、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生は、問題を解くことや資格や検定に興味があるといった回答が特徴的であり、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生は、財務諸表を分析することや自分の生活と関連付けることができるといった回答が特徴的であることが読み取れた。そのため、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生と、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生では、興味関心や理解について質的には異なる傾向がみられることが示唆された。

3. アンケート調査の分析（履修前・履修後の簿記、会計学に対するイメージ）

3. 1 分析方法

本節では、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生が持つ、入学前の簿記に対するイメージと「簿記演習Ⅰ」を履修した後の簿記に対するイメージを比較し、どのように

簿記に対するイメージが変化するかについて分析を行う。さらに、「会計学入門Ⅰ」を必修科目として履修した学生が持つ、入学前の会計学に対するイメージと「会計学入門Ⅰ」を履修した後の会計学に対するイメージを比較し、どのように会計学に対するイメージが変化するかについて分析を行う。

分析を行うために、質問5、質問6、質問7、質問8の回答結果を記述したテキストに対し、KH Coder を用いて共起ネットワークを作成した。分析に使用した KH Coder のバージョンは、3. Beta. 06a である。なお、前述している対応分析と同じ理由で「財務諸表」を強制抽出語として設定している。

共起ネットワークによって、各質問の回答結果に多くあらわれたテーマやトピックを読み取ることができる¹¹。例えば、図9であれば、「数字」、「計算」、「多い」という語が線でつながっており、「簿記演習Ⅰ」を必修科目として履修した学生が入学前に持つ簿記に対するイメージの一つとして数字や計算が多いというトピックがあることを読み取れる。

3. 2 学生が持つ簿記に対するイメージの変化（カリキュラム変更前）

図9に示すように、大学に入学する前に学生が持つ簿記に対するイメージは、数字や計算が多いため難しい、家計簿を作るために必要、銀行員が使用している、高校で勉強していたなどであることを読み取れる。

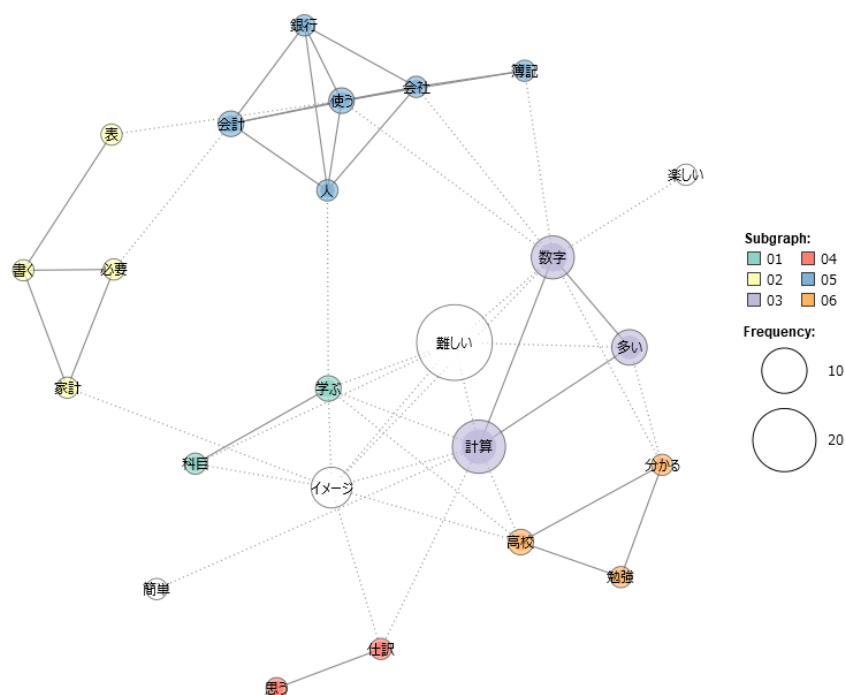


図9.（カリキュラム変更前の学生に対する質問）
質問5（大学に入学する前の簿記に対するイメージ）の共起ネットワーク

¹¹ 樋口（2020），pp.183-187。

図 10 に示すように、「簿記演習Ⅰ・Ⅱ」の履修後に学生が持つ簿記に対するイメージは、仕訳や数字の記録方法が分かると簡単である、理解できると面白い、企業の経営成績が分かると楽しい、言葉の意味を知る必要がある、覚えるべき用語が多く難しい、計算が多いなどであることを読み取れる。

そのため、問題を解くことができたり、仕訳や数字の記録方法が分かると面白い、企業の経営成績が分かると楽しいというポジティブなイメージが「簿記演習Ⅰ・Ⅱ」の履修後に追加されている。なお、計算に対するイメージは変化しておらず、覚えるべき用語が多いことが「簿記演習Ⅰ・Ⅱ」の履修後にネガティブなイメージとして追加されている。

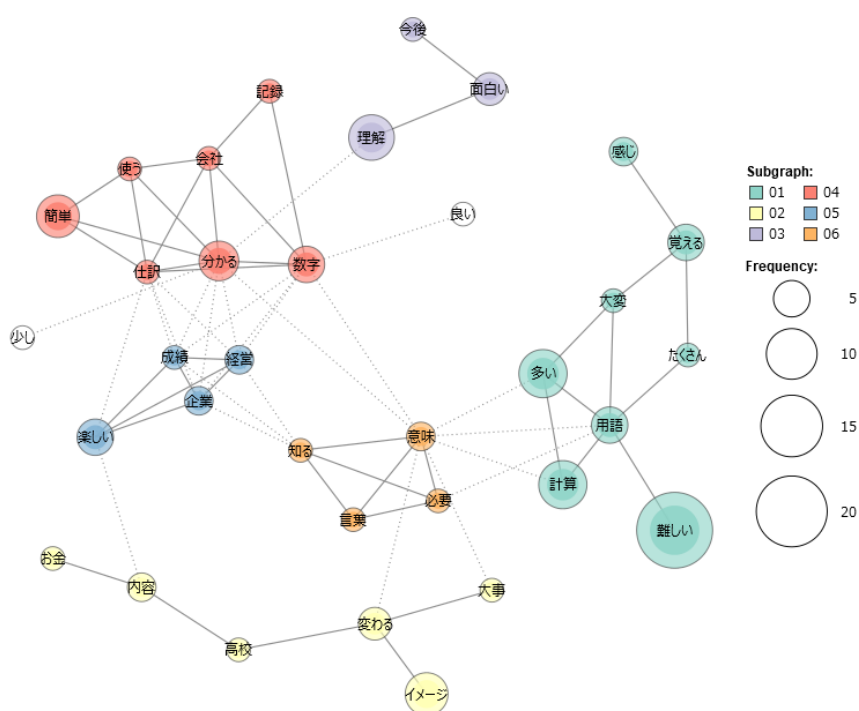


図 10. (カリキュラム変更前の学生に対する質問)

質問 6 (簿記演習Ⅰ・Ⅱを履修した後の簿記に対するイメージ) の共起ネットワーク

3. 3 学生が持つ会計学に対するイメージの変化 (カリキュラム変更後)

図 11 に示すように、大学に入学する前に学生が持つ会計学に対するイメージは、数字や計算が多いため難しい、会社で必要なもの、帳簿、電卓を使用する作業、商品を買ったときのお会計などであることを読み取れる。

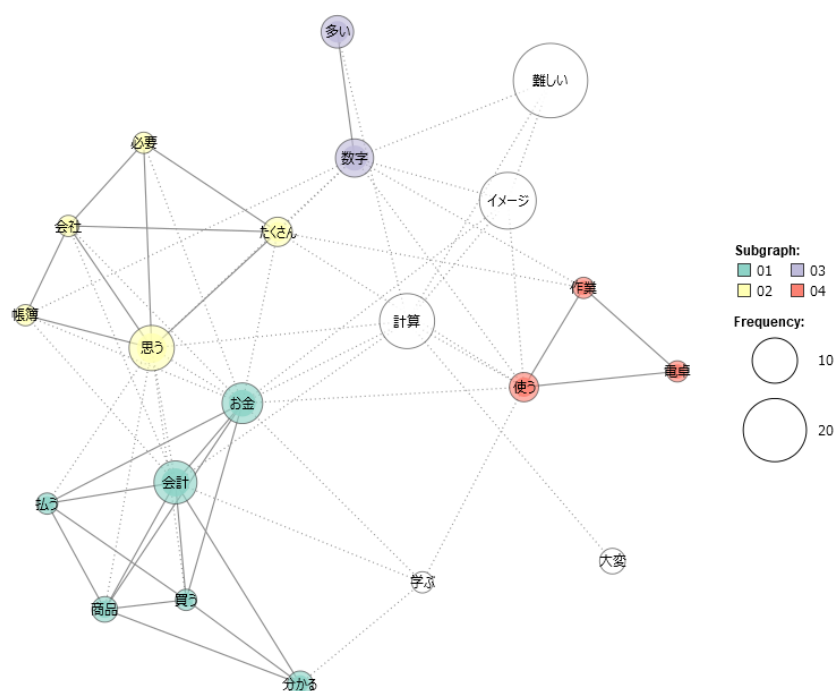


図 11. (カリキュラム変更後の学生に対する質問)

質問 7 (大学に入学する前の会計学に対するイメージ) の共起ネットワーク

図 12 に示すように、「会計学入門 I・II」の履修後に学生が持つ会計学に対するイメージは、企業の活動を記録したり分析する学問、財務諸表を見て経営状態を知る、経営状態を知ることが面白い、財務諸表を見て考える。1つ1つの数字(の意味)を理解すると楽しい、利益を得る方法を考えたり色々と計算をする、社会で役に立つことを学ぶなどであることを読み取れる。

そのため、財務諸表を見て企業の経営状態を知ることができることが面白いというポジティブなイメージが「会計学入門 I・II」の履修後に追加されている。さらに、社会で役に立つことを学ぶ、財務諸表を見て考えたり、利益を得る方法を考えたりするなど、会計リテラシーが養成されていることを推察できるイメージが「会計学入門 I・II」の履修後に追加されている。

なお、ネガティブなイメージは共起関係に強く出ていない。よって、初めに会計学を学ぶことで、初学者が会計学に対してネガティブにならず、ポジティブに捉えやすいことが推察される。また、表 8 に示した結果と併せると、社会における役立ちを知ること、初学者が簿記に対してネガティブにならず、ポジティブに捉えやすいといえよう。

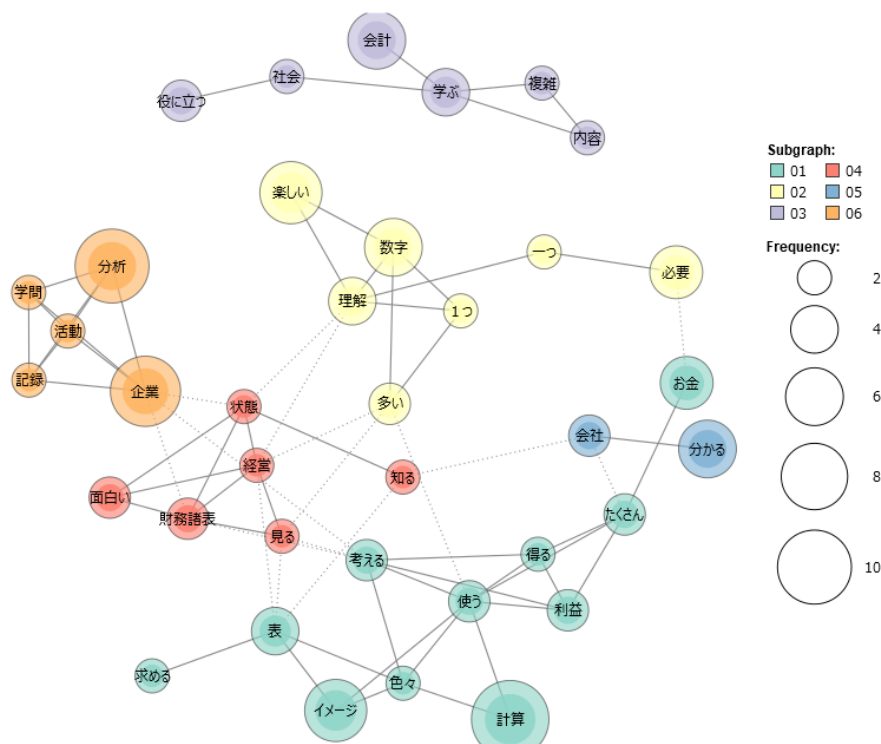


図 12. (カリキュラム変更後の学生に対する質問)

質問 8 (会計学入門Ⅰ・Ⅱを履修した後の会計学に対するイメージ) の共起ネットワーク

3. 4 小括

ここまで検討してきたように、学生が大学に入学する前に持っている会計学と簿記に対するイメージは計算が難しいといったネガティブなものとして共通している。しかし、簿記系の科目を初めに履修するのか、会計学系の科目を初めに履修するのかで、そのイメージの変化が異なることが明らかとなった。

簿記系の科目を初めに履修した(高松大学経営学部において必修科目として「簿記演習Ⅰ」を履修した)学生は、問題を解くことができると面白いといったポジティブなイメージと、計算や用語が難しいというネガティブなイメージが混在した複雑なものに変化している。この理由は、問題が解けるか否かという点に学生の意識が向いており、実社会で役に立つという実感を持ちにくいためであると推察される。

会計学系の科目を初めに履修した(高松大学経営学部において必修科目として「会計学入門Ⅰ」を履修した)学生は、計算が難しいという大学入学前のネガティブなイメージが解消され、財務諸表を見て企業を知ることが面白い、利益を得る方法を考える、実社会で役に立つなどポジティブなイメージに変化している。この理由は、会計学や簿記を学ぶ目的が十分に伝わり、学生が実社会で役に立つという実感を持つことができたためであると推察される。

よって、簿記系の科目から会計学系の科目への必修科目の変更について、その影響が示され、初めに簿記を学んだ学生と、初めに会計学を学んだ学生の間に異なる特徴がみられ

ることが示唆された。

また、高松大学経営学部会計コースにおけるカリキュラム変更は、会計リテラシーの養成を行うというカリキュラム変更の目的を達成するとともに、会計学や簿記を好きになる学生を増やすことに繋がったといえよう。

4. おわりに

本稿では、簿記系の科目から会計学系の科目への必修科目の変更について、その影響を明らかにするとともに、初めに簿記を学んだ学生と、初めに会計学を学んだ学生に何らかの異なる特徴がみられるのかについて、自由記述を中心としたアンケート調査に基づいた分析を行った。

その結果、大学入学前の学生が持つ会計学と簿記に対するイメージは計算が難しいなどで共通している一方、簿記系の科目を初めに履修した学生は、ポジティブなイメージと、ネガティブなイメージが混在した複雑なものに変化していることが明らかとなった。他方、会計学系の科目を初めに履修した学生は、大学入学前のネガティブなイメージが解消され、ポジティブなイメージに変化していることが明らかとなった。

しかし、本稿で明らかにされたことは、高松大学経営学部におけるアンケート調査で得られたデータに限られているため、一般化できていない。他の大学の研究者と協力し、今後の研究で明らかにする必要がある。

また、会計情報を用いた分析には、複式簿記の理解が不可欠である。そのため、初めに会計学を学んだ学生が、会計学や簿記に対するポジティブなイメージを保ち続け、継続的に簿記の学習に取り組むことができる教育方法を研究する必要がある。

このように課題は残されているものの、それは今後の研究と教育の実践の中で明らかにしていきたい。

参考文献

- 荒木孝治・柴健次（2015）「高校生の会計教育に関する意識—『会計教育に関する高校生アンケート』の分析—」『関西大学商学論集』，60(3)，pp. 1-19。
- 一ノ宮士郎（2008）「シリーズ会計教育の現代的課題 利用者サイドの視点からの会計教育のあり方」『企業会計』，60(1)，pp. 118-121。
- 桜井久勝（2025）『財務会計講義〈第26版〉』中央経済社。
- 柴健次（編著）（2007）『会計教育方法論』関西大学出版部。
- 島本克彦（2007）「シリーズ会計教育の現代的課題〈第7回〉高校教育の現場における会計教育の課題」『企業会計』，59(12)，pp. 97-102。
- （2015）『簿記教育上の諸問題』関西学院大学出版会。

- 曾場七恵(2021)「簿記・会計教育に関する意識調査—商学部生と社会人の比較を中心に—」
『名古屋学院大学論集 社会科学篇』, 57(4), pp.209-222。
- 日本公認会計士協会（編著）(2019)『会計基礎教育の歴史と現況』日本公認会計士協会
出版局。
- 日本公認会計士協会（2020）「パンフレット『会計は、こちらです。』」。
- 日本公認会計士協会・会計大学院協会（2015）「会計専門職人材調査に関する報告書」。
- 樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析【第2版】内容分析の継承と発展を
目指して』ナカニシヤ出版。
- 松本敏史（2007）「シリーズ会計教育の現代的課題〈第3回〉大学教育の現場における会計
教育の課題」『企業会計』, 59(8), pp.83-88。